

### Ⅲ 分科会報告

## 「歴史総合」をPBL化する

田中 則仁（日本学園中学高等学校教諭）

#### 1.はじめに(研究の背景と目的)

##### 1-1. ロシアによるウクライナ侵攻—教育は、現実世界に力を持ちうるか

2022年2月24日、ロシアによるウクライナ侵攻が開始されたことを知った瞬間、今までの歴史教育は”銃の現実”の前に力を持ちえない、そのように私は直感した。

“銃の現実”の下、世界は「リヴァイアサン」の野蛮な自然状態へ回帰し、「衰退へのシンドローム」にとらわれていくのではないか、そのような危機を感じた。そして『地獄の黙示録』でカーツ大佐が最後に残した「The horror horror……」という言葉、世界が一般社会のモラルと戦場のモラルとの断絶に引き裂かれていく、その恐怖を同じく感じた。

##### 1-2.見出すべき希望

同時に、見出すべき希望も存在した。『地獄の黙示録』の監督 F. コッポラが「神が不在の世界で相対的ではないモラルの原点に何がなりうるのか」と問われたとき、ただ一言「“la loi”（法、掟、戒律）」と答えた。それは、今まで人類が積み上げてきた「自由」や「平等」などの権利を「相対化できない価値」として見つめ直し、全てのスタートラインとするべきだという強いメッセージであった。またウクライナの人々が発する「ナラティヴ」の力強さは、一人ひとりの小さな言葉が積み重なれば、「プロパガンダ」のような大きな物語に対抗できる時代であることを教えてくれた。

そしてもう一つが、『探究する学びを作る』（藤原さと、平凡社、2020年）という書籍。そこに示された、ハイ・テック・ハイにおける教育実践との出会いであった。

##### 1-3. ハイ・テック・ハイとPBL—教育は世界を変える

固定的な知識の求め方に固執する従来の教育の在り方が、急速にすすむイノベーションの中に取り残されている。それは生徒たちの将来を奪い、社会的格差を拡大させ、社会の安定を損ないかねない。そのような世界的危機の下、教育というプロジェクトを通じて「公正」(equity)な、即ち「誰もが、人種や性別や、性的な意識や、身体的、もしくは認知能力にかかわらず、同じように価値のある人間だと感じることができる」社会の実現を試みているのがハイ・テック・ハイ<sup>1</sup>であり、その手段として実践されているのがプロ

プロジェクト・ベースド・ラーニング(以下 PBL)である。

PBL とは「現実社会に”engaging”し、意味があるプロジェクトを通して学ぶ」<sup>ii</sup>ことである。“engaging”とは、“時代を変えるために時代を引き受けること”であり、それは PBL が、「進歩主義」的かつ社会変革的な教育に分類されることを意味する。また生徒をその変革の担い手と捉え、知識の価値を社会の中に求めるという点で、それは「構成主義」的教育にも分類できる。そしてその実現すべき「公正」とは、「絶えずそれを目標として、徐々にそれに近づこうとするような」理念であり、「統制的理念」ともいえるものである。すなわちハイ・テック・ハイとは、PBL を通じ「公正」をはじめとする「統制的理念」の実現と、それによる社会変革を目指す学習機関であると定義できる。“銃の現実”により世界が再び野蛮へと回帰する危機の中、PBL はこの現実に対抗し変えていく力を持つ、そう確信した時、私はそれまで作成していた「歴史総合」の授業プランを全て破棄し、PBL として組み立て直した。

## 2.プロジェクトのデザイン

ここでプロジェクトという言葉に「特定の期間において、系統的に配置された『問い』の探究を通し、『統制的理念』の実現を目指す学習計画」と簡単に定義する。「歴史総合」のプロジェクト化にあたり、ハイ・テック・ハイにおける設計手法に、プロジェクト化のために役に立つと考えた理論を付け加えた。

### 2-1.「PBL の 9 つの要素」と「3 つの観点」の融合

ハイ・テック・ハイのプロジェクトは、①プロジェクトの開始、②本質的な問い、③アイデアだし、④批評、⑤学習スキル・知識・学習態度、⑥プロトタイプと修正、⑦発表会、⑧評価、⑨振り返り、により構成される。これに学習指導要領上の「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に臨む態度」を融合させプロジェクトを設計した。

プロジェクト名	「戦争」と「平和」プロジェクト
対 象	高校 1 年生
概 要	近現代における歴史的事象の基礎的「知識」を身に付け、関連史資料の読み解きの「技能」を活用し、多面的・多角的に「思考・判断」し読み解いた情報をもとに適切に「表現」する。また学習の結果をもとに、リフレクションと「『戦争』と『平和』」に関わる自分自身の設定した「本質的問い」の探究活動を行い「主体的に学習に取り組む態度」を身に付ける。そしてプレゼンテーションの作成と発表を行い「平和」という「統制的理念」の実現を目指す。
本質的な問い	「『戦争』と『平和』」をテーマに、生徒個人の関心に基づき課題として設定、その解答を単元の中で探究する
期 間	一年間(2022 年 4 月～2023 年 3 月…3 つのタームに分ける) ①第 1 期 4 月～7 月(1 学期)…江戸時代の日本～日本の産業革命(夏期休暇 プレゼンテーション・プロトタイプの作成①) ②第 2 期 9 月～12 月(2 学期)…第一次大戦～朝鮮戦争

	(冬期休暇 プレゼンテーション・プロトタイプ作成②) ③第3期 1月～2月(3学期)…植民地の独立～国際秩序の変容 ➡最終プレゼンテーションの作成と発表会
使用教材	共通テキスト 「ロイロノート」(学習支援サービス)
評価方法	テキストの提出 定期試験 プレゼンテーションの内容

「本質的問い」(Essential Question、以下 EQ)とは「その探求を通して『統制的理念』の実現に至る『問い』」であり、プロジェクトの中核となる概念である。

## 2-2.「逆向き設計」の授業デザイン

学習計画を立てる前に、指導目標を「EQの探究」であると明確にし、その評価方法を決め、そののちに指導計画を策定する、という授業の設計方法である。今回は生徒個人が「『戦争』と『平和』」をテーマにEQを課題として設定し、一年間のプロジェクトを通じて探求していくという手法を取った。

## 2-3.「問い」と「プロジェクト」の構造化、共通テキストの作成

「問い」の構造化とは、より下位の「問い」、即ちサブ・クエスチョン(Sub Question SQ)の探究の積み重ねによりEQの解答にたどり着くことを意味する。それは同時に、解答にたどり着くためのプロジェクトもまた構造化されることを意味する。EQにたどり着くための一年間のプロジェクトは年間指導計画に相当し、それはSQを探求するための下位のプロジェクトに相当する単元指導計画の集合として構成されることになる。そしてそのSQもまた「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に臨む態度」に関わるさらに下位のSQ(Sub-Sub Question S-SQ)によって構成され、EQはSQへの、そしてS-SQへの解答を通して探求されることになる。それぞれのレベルでのプロジェクトを効率的に遂行するため、系統的に「問い」を配置した共通テキストを作成した。

## 2-4.「反転授業」の一部導入

動画等による家庭学習を経たうえで対面授業に参加することを意味する。一方で、生徒の資質や時間的な制約から自作動画による反転授業の完全実施は難しいのが現状である。そのため、テキストの「知識」に関わる部分をデータとして生徒各々に送付し、それをテキストに記入したうえで対面授業に参加する、という部分的な導入を行った。これにより教授を効率化し「対話」を中心とした授業を展開する時間を確保することができた。

## 2-5.学びの三位一体論—「対話」を中心とした授業

50分間の授業の探求を、資料の分析を通じた「対象との対話」、対面授業での「協働」による「他者との対話」、「リフレクション」と「メタ認知」を獲得する「自己との対話」に対応する三つのSQによって構成する。また「対象との対話」は「技能」の、「他者との対話」は「思考・判断・表現」の、「自己との対話」は「主体的に学習に関わる態度」

の育成に関わる「問い」としてテキストに反映した。

## 2-6.学習支援サービス「ロイロノート」の活用

教材を配付し通知する機能を部分的「反転授業」に、解答を一覧回収、共有し学び合う機能を「学びの三位一体論」の実行に用いた。そしてつなげてプレゼンテーションの機能をプレゼンテーションの作成に応用した。

## 2-7.エクセレンスの倫理

上記のプレゼンテーションには、ターム間の長期休暇中に作成されるプロトタイプと、最終プレゼンテーションの2つが存在する。まずはプロトタイプに対して生徒間の「批評」や教員の「評価」を通して作品をより洗練化させ、努力することや前向きに取り組むこと、美しいものを作るということの素晴らしさなどを身に着けることを目指した。それにより最終プレゼンテーションでは作った生徒本人、さらに見る人に感動をもたらすようより洗練化させ、プレゼンテーションを外部に対して真に力のあるものになるように導いていく。

## 2-8.オーディエンスのヒエラルキー

最終プレゼンテーションを教員だけではなく、保護者や学校外の専門家、世界に対し行うことを意味する。それにより生徒のプレゼンテーション作成と発表に対するモチベーションを高めることができる。同時に、生徒と「現実の世界」に生きる人々の間に弁証法的な働きを生み出し、プレゼンテーションによる現実世界への働きかけを可能にする。

## 2-9.生徒中心の評価

「形成的評価」を中心に評価を行うことを意味する。授業ごとに「ロイロノート」でテキストの内容の写真を撮り提出し、提出されたテキストの内容をもとに、「知識・技能」＝4点「思考・判断・表現」＝4点「主体的に学習に臨む態度」＝2点の合計10点満点で評価を行った。しかし現在の学校の体制上、定期試験などの「総括的評価」を中心に評定を行わざるを得ないため、「総括的評価」を「形成的」に用いる。定期テストの出題方法を「知識・技能」＝60点、「思考・判断・表現」＝30点、「主体的に学習に臨む態度」＝10点の合計100点と、観点を明確化した出題を行った。そしてそれぞれ観点別の評価の数値の合計点をさらに10点に換算し、ABCの3段階で評価する。それにより多面的な評価を可能にし、評価と評定の乖離を埋め合わせることを可能にした。

## 3.課題と展望

現時点(2022年12月現在)における振り返りや、今回のプロジェクト遂行の中から見えてきた課題、そしてそれらの成果をもとに、今後の展望を示したい。

### 3-1.現時点での振り返り

プロジェクトを進める中で、生徒からの肯定的な反応が返ってきた。今年度ゴールデン

ウィーク明けに高校1年生を対象に行ったアンケートの中で、約過半数の生徒が最も役に立った授業として「歴史総合」を挙げていた。また「暗記とその再生」だけではない、生徒の能力を多面的に評価することができたことは、新たな発見であった。

一方で、生徒が挙げた「問い」が本当の意味で「本質的な問い」となるような指導が行えないままである。また教員にとっての「持続可能性」も問題である。この授業ごとの5クラス140名の、各観点の評価を行うために休日や研究日をほぼ費やし、自作テキストの作成、定期テストの作成などに多大な労力を要した。来年度以降、必要のないところをいかに切り落とすことができるかは大きな課題である。

### 3-2.展望①—教育活動全体のプロジェクト化

ハイ・テック・ハイが「統制的理念」の実現と社会変革を目指すというプロジェクトそのものであるとするならば、同様に学校全体をプロジェクト化する必要がある。今回試案として、学校全体を「co-el project EQ to EQ」<sup>iii</sup>と名付けたプロジェクトそのものとして設計することを構想した。①知を co-el、②教科を co-el、③ルールを co-el、④同質性を co-el、⑤場所を co-el の五つのプロジェクトで構成し、具体的には各教科の PBL 化、STEAM 教育や国際教養教育などを構想している。

### 3-3.展望②—「総合的探究の時間」(以下教科「探究」)のプロジェクト化

上記した「co-el project EQ to EQ」に基づき、教科「探究」も PBL 化することを目指す。現任校にも教科「探究」は存在するが、単なる「体験学習」に過ぎない、内容が何年間も変化していない、など多くの問題点が存在する。教育内容の「既得権益」化とそれによる「不磨の大典」化は生徒たちの将来を奪い、社会的格差を拡大させる恐れがある。様々なプロジェクトを構想しているが、以下にその一例を紹介する。

プロジェクト名	④「同質性を co-el」 / 「ジェンダーギャップを co-el」プロジェクト
対象	高校1年生
プロジェクト	ジェンダーについて、生物学的・社会的な観点から基礎的な「知識」を身につけさせる。また諸資料を読み解く「技能」を活用し、現代社会におけるジェンダーギャップとその解決方法について多面的・多角的に「思考・判断」し、読み解った情報をもとに適切に「表現」する。また「リフレクション」と「本質的問い」の探究活動を行い「主体的に学習に取り組む態度」を身に着ける。そしてプレゼンテーションを作成し「(ジェンダーの)平等」という「統制的理念」の実現を目指す。
本質的な問い	私たちの住む世界において、「権利」と「自由」の実現である「ジェンダーの平等」はどのように達成できるか。また、教員自身も、自身の「生-権力」に自覚的になれるか。
期間	一学期(約3カ月) ➡ 最終プレゼンテーションの作成と発表会

このプロジェクトは生徒に対してのプロジェクトであるだけでなく、教員自身のジ

エンダーバイアスを浮き彫りにするためのプロジェクトでもある。現任校は男子校であるが、同僚の言動に見え隠れするジェンダーバイアスに違和感を覚えることが多い。しかもそれは、男子校内の異性教員においても同様である。教員自身の無自覚なジェンダーバイアスが「生権力」として生徒に刷り込まれることにより、社会に「ガラスの天井」を再生産することになる。教員自身が自身の「生権力」を自覚し社会の「ガラスの天井」をなくしていく意味でも、このプロジェクトは意味を持つ。

### 3-4.展望③—プロジェクト・マネジメント・オフィス(PMO)の立ち上げ

学校全体をプロジェクト化し教育活動全体を通じての「統制的理念」の実現のためにはプロジェクトの進行を見守る部署が必要であり、それをプロジェクト・マネジメント・オフィス(以下 PMO)と名付けた。生徒の募集から3年間、6年間のプロジェクトの遂行、そして進路決定までを一元的に見守る、プロジェクトの中心となる機関を意味する。この部分に関しては、その具体的な実現に向けて現在構想中である。改めて研究報告ができる機会を持ちたい。

### 4.最後に

PBLにおいて重要なことは、世界が不完全である限り、現在教える内容の真実性が永続的に保証されることなどありえない、という認識である。事実、国連安保理理事国による隣国への武力侵攻など、思いもよらなかったことが現実に起こっているのだから。三十年後の子どもたちに、「あなた方はいったいその時何をやっていたのか」と問われたとき、「この悲劇を二度と繰り返さないために、世界を変えるための教育を実践していた」と胸を張って答えたい、それが今の私自身を突き動かしている。「昨日の教え方で今日教えれば子どもの明日を奪う」(J. デューイ)という言葉に胸に、世界に働きかけ、世界を変えていく教育を目指していきたい。なお今回の研究において、現任校前校長小岩利夫氏、現任校職員小野塚美保氏に、その豊富なキャリアに基づく多くの助力や助言をいただいた。この場を借りてお礼を述べたい。

### 参考文献

- 『柄谷行人インタビューズ 2002-2013』 柄谷行人 講談社 2014
- 『シチュアションⅡ』 J. P. サルトル 加藤周一、白井健三郎(訳) 人文書院 1981
- 『インストラクショナルデザインの道具箱 101』 根本淳子・市川尚(監修) 鈴木克明北大路書房 2016
- 『アクティブ・ラーニングを始めよう! 学ぶことと社会のつながりを作る教育』 岸磨紀子(編) 明治大学教育会紀要編集委員会 明治大学資格課程事務室 2016
- 『悪について』 エーリッヒ・フロム 渡会圭子(訳) ちくま学芸文庫 2018

『解説「地獄の黙示録」』立花隆 文芸春秋社 2002

『社会的構成主義におけるヴィゴツキーとデューイ：「活動」概念の導入は何をもたらすか』古屋恵太東京都立大学人文学部 2001

---

<sup>i</sup> ハイ・テック・ハイの創始者でラリー・ローゼンストックによる定義

<sup>ii</sup> アメリカの教育研究機関PBL Worksによる定義「Project Based Learning(PBL) is a teaching method in which students learn by actively engaging in real-world and personally meaningful projects.」に対する筆者の訳

<sup>iii</sup> 越境体験(“越える”)、協働(“co”=共に)、苦心して作り上げる(“elaborate”)を組み合わせた造語であり、EQ(本質的な問い)への探究を経て「本質的な価値」(Essential Quality=統制的理念に基づく価値)にたどり着く、と言う意味で命名。